



Title	追想：黒沢三樹男博士の学位論文出版にあたりて
Author(s)	上遠, 章
Citation	Insecta matsumurana. Supplement, 4, 93-94
Issue Date	1968-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22226
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_P93-94.pdf



追 想

—— 黒沢三樹男博士の学位論文出版にあたりて ——

黒沢三樹男博士は明治36年(1903)4月30日黒沢源七氏の三男として東京府北多摩郡王子村(東京都北区王子町)に生れた。尊父は王子権現神社の近くで明治時代から医院を開いて居られた。黒沢さんは男4人、女2人の兄弟妹の真中に生れ、お医者さんの坊ちゃんとしてノンビリ育ったので、成人しても至極温順な鷹揚な性格を持っていたので多くの人から好かれていた。その反面ガメツサがなかったので自分の主張を上司に対して貫き通すような性格の強さがなかった。しかし黒沢さんは御両親、奥様、御子様に対して大変やさしかった。妹さんも、兄は大変親孝行だった、と申しておられる程である。奥様は永く病弱で手術をなされたり病床につくことが多かったので、奥様の病気を常に心配され、御自身が重症で入院中も見舞に来られる奥様の体を大変必配され、逝くなられる前まで奥様の体を気づかっておられたのは、誠に黒沢さんの奥様に対するコマヤカナヤサシイ心遣いは涙なしでは聞かれない美談であるように思える。また黒沢さんは都会人のような頭の回転が早くて上手に立ち廻るようなことができない人であった。黒沢さんは正直な人であった。対外折衝にも掛引きをしないで始めから本当のことを言うので、結果としては良いこともあったし、そうでないこともあったが、総体的に考えればその方が早く解決してよかったと思えた。

黒沢さんは子供の頃から風邪を引き易い弱い子供だったので御両親にもそれだけ大事にされたようであった。私立成蹊中学を出てから東京帝国大学農学部実科に入られたのも、日光やよい空気に接する農業がよいということによるようであった。しかし、駒場時代には身体も相当丈夫になり、農学部の運動会でランニングの選手として活躍されたし、山登りなども好きであった。大正14年農学部実科を卒業されてからチブスにかかられたりして療養に時をかけたが、昭和2年5月、自宅から割合に近い西ヶ原の農林省農事試験場昆虫部の見習生に入った。当時の木下昆虫部長から総翅目の分類、生態等の研究題目を与えられた。黒沢さんは特に昆虫が好きで昆虫部に入ったのではなかったもので、始めのうちは先輩の指導を受け苦心してスリップスと取り組んでいたが、たまたま昭和7年春にハワイのパインアップル研究所の昆虫技師、埼玉村干城氏がスリップスの天敵採集の目的で私を訪ねて日本に来られた。埼玉村氏は西ヶ原の昆虫部でその仕事をすることになったので、スリップスの研究者である黒沢さんがその仕事を援けるようになった。それによって黒沢さんもスリップスの研究の重要性を認識し、生涯の仕事としてスリップスと取り組むようになったように思える。西ヶ原で5年間スリップスの研究をした後、昭和7年9月、横浜税関植物検査課に就職された。昭和8年10月、黒沢さんは埼玉村きくさんと結婚された。きくさんは埼玉村干城氏の妹さんで当時西ヶ原でスリップスの天敵の採集や飼育の仕事を手伝っておられたので、全くスリップスが取り持った縁と申してよいかと思う。

植物検疫の対象害虫にはカイガラムシ類を始めスリップスも多くあるので、黒沢さんは昭和20年1月まで12年余り横浜税関植物検査係主任として植物検疫上の害虫の調査研究に多く

の功績を上げた。その間、総翅類の新種も発見された。戦争末期に茨城県立農事試験場病虫主任、地方農林技師として赴任された。食糧の不足の折柄、食糧増産の一翼を担い県内の病害虫防除に努められると共に、資材不足の対策として病害虫防除試験を行なわれた。戦後、物資不足の折柄、最も信頼されていた御尊父を失なわれ、その精神的打撃もあり胃潰瘍になり長く病床に臥することになったが幸に全快するに至った。昭和23年当時新設間のない農林省農薬検査所の生物課長に迎えられ生物系の整備、充実に努められた。昭和27年3月、農薬検査所を退かれ日本特殊農薬製造株式会社農事試験場昆虫主任として転職された。当時は新殺虫剤、ホリドールの試験時代であったので薬効試験に献身的に努められ、続いてディブテックス、バイジット、メタシトックス、エストックスなどの新有機燐剤の開発試験に献身された。

黒沢さんは旅行する時はいつも管瓶を持ち歩いて目につくスリップスは採集しておられた。スリップスをルーペの下で見ている時が一番楽しいように見うけられた。昭和40年、農事試験場が農薬研究所に改組されると生物部長兼農場長となり、41年には総務部長となり農薬研究所の運営に大いに努められた。

黒沢さんは昭和41年夏頃から身体の調子が悪くなり腹部の重圧による不快感を訴えられ、日頃好きな甘味も取られなくなり病気と戦いながら研究所に出勤していたが、昭和42年3月には咳が多くなったので日大病院に入院され手当を受けられたが、4月10日朝遂に不帰の客となった。病気は癌で腎臓から肺臓まで転移していた。

なお黒沢さんは2人の子供さんを持たれ、長女祥子さんは武藤和雄氏(十条製紙 K.K. 勤務)に嫁がれ1子を持たれ、長男乾一君は電機大学を卒業され藤嶺学園藤沢高等学校工業科教諭として通勤されている。黒沢夫人は乾一君と2人で国立市の家に住われ逝き人を偲んで静かに暮しておられる。

黒沢さんは日本における総翅類研究の第一人者で、数多くの貴重な業績を発表して、広く海外からも知られている。黒沢さんの一生をかけた総翅類研究の結晶である学位主論文「日本産総翅類の研究」はわが国から記録された種類をあまねく検討し、さらに新種4種、未記録種10種を加え、わが国における最初の総翅類の総括的研究である。本論文の出版は昆虫分類学上はもとより、応用昆虫学上裨益するところがきわめて大きいものと思う。

黒沢さんが学位論文を北海道大学に提出した際には同大学名誉教授内田登一博士に負うところが少なくない。また本論文の出版は同大学教授渡辺千尚博士の御支援によるものである。この機会に内田・渡辺両教授に私からも厚く御礼を申し上げたい。なお本論文の出版費については日本特殊農薬株式会社の加藤幸助社長の御好意によるものである。ここに記して加藤社長に深謝の意を表する次第ある。

昭和42年11月15日

日本特殊農薬製造株式会社

農薬研究所長 上 遠 章